

うたたぬの日さまし

著 者 梶川成人

(当時、御預所代官役兼祐筆見習)

資料提供 並河正明

(会員 佐伯市常盤西町)

文書解説 鶴野博文

(会員 佐伯市田ノ浦町)

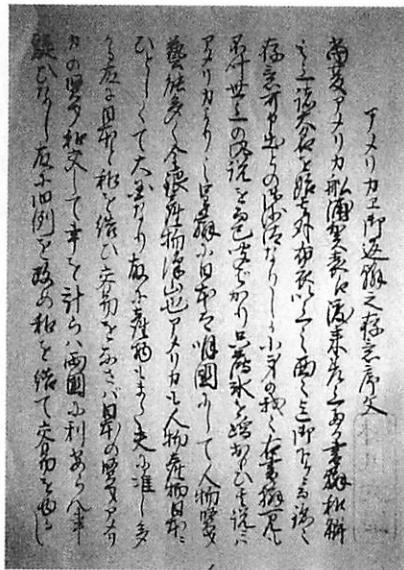
概要

ペリーのもたらしたアメリカ大統領の国書に、時の佐伯藩士梶川成人は、どのような感想や意見を持つていたのでしょうか。

一はじめに

黒船来航によつて鎖国太平の長いうたた寝から目を覚まさせられた幕府は対応策に全く無力のところへ十二代將軍家慶も嘉永六年の同月(来航の六月)に死ぬという大

混乱状態となり、それまでに前例のない、いわゆる「諮問政策」を採用、大名は勿論、藩士庶民にいたるまで広く意見を求めたのでこの文書も残つたわけです。原文は祐筆(書き役)だけあつて、書体・文章とも整然として読み易く、文意も読みながら理解できます。なお、文字・かな遣い・段落など一部調整しました。



二 本文 アメリカ工御返翰之存意序文

当夏アメリカ船浦賀表へ渡来、差し上げたる書翰、和解（和訳）の上、諸大名を始め其の外 布衣（江戸時代無位無官の幕臣や諸大名の家士）以上の面々迄お下げにて銘々の存意申し出づべしとの御沙汰なりしが小身の我々右書翰一見も仕まつらず世上の風説をのみ聞くばかり只薄氷を踏む思ひ。

その説ニハ、アメリカよりの書翰に、日本は文明国にして人物賢才藝能多く金銀產物沢山なり。アメリカも人物產物、日本ニひとしくて大国なり。故に產物もまた夫に準じ多かる故に日本と和を結び交易をなさバ日本の賢才アメリカの賢才和交して事を計らハ両国に利あらん事疑ひなし。

故に旧例を改め和を結んで交易をゆるし心えなくハ先ツ五年か十年なとして見て損あらハ其の節ニ至り止めんも可なり。もし旧例を守り交易を免ざずんハ軍船を向けて戦わん。其時後悔すべからず。能々思慮をまわし天子將軍、安全長久たらん事を考え来春迄ニ返翰を認め置くべし。其の節は船を増して來らん。返翰に寄つては早速軍船數百艘を向けんとの書翰なるよし聞き知りぬ。

然るにこの節に至つても存意申し出でざる向き有るに依つて当月中ニ差し出すべしとのよし猶又御沙汰なりしが、我々も其の職に有る那らば及ばずながら早速に愚存も返翰し文に綴りて差し上げたしとハ思えども小身のかなしさハ平地に有りて星をつかまんとするが如し。只、庚申塚の猿になり目耳口を閉じて居んより外なし。

天子 乃軍安寧長久に之キト考へ本委與近
衛と護主一モキモ私と博てあり人並無哉
若水軍船數百艘と向ざる事無哉
ノハシナリ少くも心も病まやむする向ざる事無哉
仲ニ可見及ヒトノ一粒又即ち後日一粒モ
ト自給ノハスミテナムアホ水ミ充存ニ過滿トシ
テ落立ト也「よも少オリカ」一さハ平地も有て

世の有様を考ふるに明賢なるもの、たまたまひとり、よき存意を述べるとも、大将の賢薄き時は、只多分に付き人とすれば一智も十愚のために誘われん事往古より其の例の少なからず。

去りながら四海の為には、我が存意の用いられざるを知るといえども、述べざるは義にあらず筈を知つて、大將

是を用ゆる事あらば四海の幸い、用いられずば不幸なり。

故に大將たけし為るもの賢才なきは四民ともに苦しまん。

我もその身分にあるならば愚まい短才なりといへども

天下國家の為なれば、左の趣申し上げたく思えどもその

職にあらざれば能はず。

星を多くとるふ。一品庚申家の様より自耳に
と聞て居へり外か。世々有相ゆうじやうと考ふ。名喚めわ賛
ふくろの由ゆ。ひきりよし。宿意しゆぎと運うんす。もちの
譽ほ應おう。財ざい。人ひと。それ一智いち。十萬の物もの
諸よと人ひと。財ざい。人ひと。而がて利り。人ひと。財ざい。
利り。人ひと。財ざい。人ひと。而がて利り。人ひと。財ざい。

他ほかの唇くち葉ばをくわう。余よ半はんとがふる己おの
を處あつかむ事ことは慢まんとて極きわめに難むずかしくて
考かん察さか致むかせ。一念は處あつかむ事ことを爲ためて利りと見ての圓
圓えんを利りんで利りとせば。美うつくしと利りと見ての圓えん
事ことと考かん察さか致むかせ。一念は處あつかむ事ことを爲ためて利りと見みせ。性せいたり
利りと一念と何なんのふれり。有あ人ひと。財ざいと漏もろてし
國こく度ど。有あ人ひと。財ざいせざれを連つづせ。利りと一念と見みせ。利りと一念と見みせ。

去夏、浦賀表へ四艘を向けて和を結び交易をなさんと
の書翰の趣、遂一披見に及ぶところ、皆利欲のみを専らに
して義なし。

日本国は利をもつて利とせず、義をもつて利とする國
風なれば、其の書翰の趣を見聞きする誌儀しげい（記録係）を始め
万民に至るまで、蜂の巣をたたく如し。

返翰にも及ばず焼き捨てんとする処なれども、日本の
趣意を示さざれば國の正しき事を知る事あるべからず故
に返翰せしむるなり。

その条々は第一に、和を結ばんとの趣その意を得ず。往
のみ。（これからは梶川成人、個人の意見）

只、我が愚案を記し置き、他の賢案を見比べん事を願う

古よりその国と日本と何の不和が有らん。波涛を隔てし
國故音信贈答せざればとて是を不和というべからず。

不和なれば和なり。既に是まで鉢を交えて弓砲を發せ
し事もなく何ぞ今改めて和を結ぶに及ばんや。

常也。

陸に於いては外国の船と見れば嚴重にせざる時は上陸
なし民家を乱妨し米穀を盜む。依つて止む事を得ず是を
殺す。殺す事を嫌う故に、海岸に大砲を並べ武器を鋤りて
これを守るは上らせまじき為也。その上のほらせまじきは殺
生を嫌うのゆえなり。

敵を殺す事あり故に敵を嫌ふ事もいふ
ちまも殺く事も今改めて相を嫌ふ事もいふ
國の船日本近海にて乗組みあはれ
是船といひてた洋より入合りて西船をあはれ
極多くして漂流の浦もてかへ遙かにあはれ
の商船もあはれり米穀を奪ひて空船怪異のや
の船と見る船の商人より小舟とて船を離さ
ばひ満ちてお車船也難い放て外洋の船と不
當をさせうるハ止體かとて船を離さ
盡ひ傍ら事無くはともと晴りて是をやむハ止
海各小舟にて並ぶ

又、其の國の船日本近海に来れば、仇敵の如くになすと

の趣意、愚智といふべし。

大洋は入会にして正船のみにあらず。賊多くして漂流して
の躰にもてなし近海へ乗り來り、日本の商船へ乗り移り
ハ恐れおののき、盜賊猛獸の如く思ひ湊々へ逃れ入る事

殺生を嫌ふは仁の実也。故に其の國の船多く漂流して
近海へ來りし時は、亂の如く、海岸の備え嚴重なる儘に、
仇敵の如くすと思うも宜也。然しこれを恨むはその根元
を知らざるゆえなり。

うちき島也あまくせうせうせうせうせ
殺生を嫌ふにの美也あまもと國の船も一層流
して過満布引しらば孤のめく海唇の体落もあら
に仇敵のやくえし因ても直也落一毛を惜ひも
極えとえぐるゆ一也械船ハ國を偽りうど仰て伸
ひと仰くうあらあらあらあらあらあらあら
船一そみて外國船とんの船の船の船の船の船
はくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
ふみへて何干仇敵のめく思ふもと假にさる船の
あらう船也必え恨ひをもくは械船と防ぐ船の
あらう船とあらう船と恨み杯ハ械船を假に

賊船は國を偽り印を似せて油断を伺うが常なる故に、印を見て正船を見分けんこと難し。これを以つて外国船と見て、邪正の分明ならざる時は、警衛嚴重ならずんば有るべきらず。

故に正賊分明なるに及んでは、何ぞ仇敵の如く思わん。これを悟らざるは智の至らざる処なり。必ず恨むべからず賊船を防がん為に仇敵の如く海岸を固むなれば、もし恨みんなどは賊船を恨むべし。

海へ支那船とあそびてのぞき多國あれども常ゆ是とも多國を大國すて財物を積海山あよし

書簡の赤文を以て金後は支那とあきハ利あへ
とめぬとし支那とをせんハ軍船とゆふと文体ナ
兜のたまむれ文字一実子交易とをんと欲もあ
れハ國の文書と赤文を以て度也もかく人頭と
筋子と手と頭を寄て端り落する交易とを
まほ日本にあそびとあるふれを構りて寄て
うか一文角と免支名あすの少壯者や己もあ
筋り水と絆びて交易とをい缺をあさる君也
なまく口を拂りあはれとぞして交易とゆき

又、交易をなさんとの望み、貧困なれば 尤もに聞こゆ
れどもその国は大国にして產物金銀は沢山なるよし、書

翰の前文に顯し置き後に交易をなさば利あらんとの趣、もし交易を免さんば軍船を向けんとの文体、小兒のたむれに等し。實に交易を望まんと欲するのならば、國の貧しきを前文に顯し、產物も少なく人民を養うに足らずと断りを置きて謙り後に交易を望まば、日本は仁恵を専らとする國なれば憐みを依しみ利なく交易を免すまじきものにも非ざるを、己は愚を飾り和を結びて交易を望み、欲を知らざるは愚かなりなどと日本を嘲り、もし古例を守りて交易を免さんば軍船を向けんとは俗にいう出来ない相談の最上と謂うべし。

支那軍船とゆふとハ殊々支那船の、其後の事とて
謂つて、支那の船と不外の青葉一葉の内に、支那
船を全般の因りて、自前かく利に處す也。支那
利にありて、育て資へ、一助方利甚く人り
其實財を乏し、靖西にてあざれとて、少無修令
為ゆる諸邦形と人子ても、鳩もすらや、若人敵
所へもと捕てて、一乞うて殺す人毛に、餘の
船と一々争ひ、支那と免さるへ、軍船と向んと欲
き少黒あらず、あと、勢方の支那の志存
と支那の謀叛の意、いきとねをもととを立

譬は、見ず知らずの肴賣り一家の門内へ入り来りて、
「我々は、金銀に困らず不自由なし。利口發明也。貴様も
利口なり。依つて肴を買えば双方に利あらん。もし買わざ
る時は座敷へ踏み込んであはれん。」と/orが如し。

たといいかなる結構なる人にも怒らざるや有らん。
人数あらば生け捕りてくるくる巻きにして殺さん。手に
余らば殺すべし。

今交易を免さずんば軍船を向けんとの趣意に異なる事
なし。たとえ双方に交易の志有りたるとも是にては免す
事能わず。其の一言にて万代迄も交易の談話断絶せり。是
を以つて是を見れば交易を望むに非ず戦いを望むと見え
たり。

又、戦いを望むは不意に数百艘の軍船を向けたんや、
何ぞ合戦に案内の入るべきか。ここに是を見れば、又軍を
望むとも思われず。全く交易をなしたきものなれども等
閑の書翰にては、日本の旧例ありて免さざることを悟り、
数年、泰平なるまで軍船を向けんとい言わば恐れて速や
かに交易を免さんと拙なる謀事を述べて愚者のかなしき
妙計と思い、小児をおどす如き書翰を波濤を経て持参な
すこそご苦労千万なり。

五年十年ありてそ一利口の時へ至り候
事ありといひ若者を遣すのあらりあめさもん智
とまの候ことらハ若者何をキアリキアリ候事
ある事もども捨置へ同本の半トアラふし候事
利口有りやよ同本ハ利口好うに候事にて利口
四例とのこちうな候事なり利口好うに候事
候事の交渉で免さざれ候事候事にて利口
事有りと云ふ事あり又交易で免さざれ候事にて
軍船を櫂船免れと仰へ候事候事ありと仰
候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事
事候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事

もし賢者あらばこれを止めんに、その国に賢者なき由故なりと察したり。又、交易を免さば西国に利あらん。もし心得なくば五年十年ためし見て、もし利なき時は其の時に止めんも可なりとハは愚者を進むるの意なり。

ためさずんば知る事の能わざるは愚なり。賢者なんぞ、これ等の事をためさずとも損益は目前のことを見るが如し。

たとえ利益あるにもせよ日本は利を好まず義を以て利益とす。旧例をのみ守るに非す。元より利を好まざる國風故に交易を免ざる也。この道理をよく会得して再び交易を乞うことなかれ。

又、交易を免ざるに於いては軍船を数艘向けんとあらば勝手次第たるべし。何ぞ驚く事あらん。

今に始まらず元より外国の賊船を防がんために大砲用意有ることその数を知らず。この度新たに百里を走る大船數艘を一發に打ち碎く大砲數十挺を当國に於いて造りたて、外、六十余州にて造るところの大砲、数うるにいとま非ず。故に聊も武器に不足なし。

其の國は大国と聞き及ぶ。定めて人数も日本に百倍すべし。軍船もそれに準じて多かるべし。あらぬ限りは向け

来るべし。

仁を守る國風にして殺生を悉く嫌うといえども、義を見てせざるは勇なし。交易に事寄せ死を望み人民を損じ不便に存じ、嫌いの殺生なれども望みに任せひとり残らず殺し遣わすべし。

日本は外國と異なり抑神國にして、弓矢は勿論、水中の業も勝れ、人物いすれも賢才にして雜兵士民にいたるまで悉く智謀あり。戦いに一騎当千の兵数ふるにいとまあらず。

卷之二
主外諸侯余聞焉遂て不の大砲をもつと莫脅
敵子御も或寫るも豈此一モニはちゆと當て未定
く人間も日本も百倍も一軍船もあら准一で多
ミ一舟一ぬ陽りハ勿リ東の島一にそちも、虎
少て殺生を悉く嫌ふとこももあとぞてやま
ハ勇か一安易の事あや死を恐るゝ人々とせん
志一も候ふ存し様の聲をあれも至り得や太
も残殺一もひ過一日本ハ外乎とぞ承り極津合
ナテアリ矢ハ勿論水中の業を猪き人鬼併殺し
勝ヌシテ雜兵士民ふもと志く智謀百戦小

ば人民を撫育するに足らんとの謀り事なるはその肺肝（心中）を見るが如し。浅ましきというも言語に絶えたり。

一廻高才の金物ふるまいを荷へて渡る海舟、羨慕
と稱へ古儀と接竹策を並べ置き、火矢玉入事自
からして施設を計り、漁港が大風浪の天を擋め
供平日出で、若手ちり若手軍船等々も傍らや半身
うづく人云々國ハ大玉丸れども米穀乏しく人民
を養ふ小生産の爲に、日下と和を添ひ、安否をかぎ
而仕掛を拂或々全恨むる者食のあざなは米穀莫
易かし人民と教育せん、海舟へも加し難く
應、我と好む、お育んじて育かて名す人と軍船と
向へとばほの虚言かれてたゞい（軍船と
當れて安否と免てんたうちれ、人民と教育せん

殊に海岸に台場を構え古儀を積み竹策を並べ置き、ボ
ンヘン名火矢千貫目玉入の大砲など数を知らず。凌く小
大砲今もつて天を覆いその備え平日とて厳重なり。故
に軍勢一人も損ずる事あるべからず。
又言う。その国は大国なれども米穀乏しく人民を養う
に足らず。依つて日本と和を結び交易をなし、羅紗、猩々
緋或は金銀玉など不食の物を以つて米穀を交易なし、人
民を撫育せん為ならん。その故もなく慰みに戦いを好む
国有らんや。交易を免さんと軍船を向けんとは方便の虚
言にして左も言わば軍船を恐れて交易を免さん。さすれ

日本は米穀不足なき故に利を好まず、交易を嫌う。交易
せざる故に、國中食乏しからず。たまたま漂流して来れ
ば、正賊（正船か賊船か）が分明なるにおいては日本にて
食すべき肉をも与えるのみ。

日本にては米穀に増したる富あらず。金銀にまさり羅
紗、吳帛服、猩々緋に身をまとわれ居るとも、米穀つきな
ば、生を保つこと能わず。一國に交易を免さば万国これを
聞きて皆來らん。小国をもつて大国数百国と交易なれば、

羅紗、猩々縫、或いは種々の産物は山をなすといえども米殻一粒も残るべからず。

傍あれハニヨリ多あら原、安希あ利五、一あは
小利あはとハ日中も居ても不居也。あとひ亦未便と
食をみと易くされ、大半の者者ハ大利ト思ふ也。行
きとも穀、豆そよ。及んとハ儀シ未持しもの千乘
金を持てましめぬ。猶も通じ共仰よありて一方は
の量より多く淮り珠米と譲る者、らんや
あるを以て性をより安易と免まし也。阿革既に富
の毒物を牛糞かして、是れハモミ免矣とみて
便利とみる已にして全の者而ヒムシ御成販
長崎かわらての事也。利シ浦斐表を函示して、當
の宣傳を破り殊く厲と乞ふ事、高麗も後也文

石炭とても同様なり。一方に損あれば一方に益ある故
に交易に両利なし。両国に利あらんとは日本にては不信
なり。たとい米一俵と金百両と易たれば大国の愚者は大
利と思うべけれど米殻尽きるに及ばんとは、一俵の米持
ちしもの千両の金を持ちしものに勝るべし。
此のときに至りては万国の實に易えんと言うとも誰か
この米を譲る者あらんや。是をもつて往古より交易を免
ざざる也。オランダは万國の産物を仲買なしてあるなれ

ば、これをゆるすを以つて便利と為すのみにして食の交
易と言うにあらず。既に長崎においての事なり。剩ヘ浦賀
表まで渡來して日本の定法を破り、殊に一島（小笠原か）
を乞うこと不届至極なり。

若と免さるへ軍船と仰へと書翰、載せ免さる
の艦船と往て虚言と加て軍船と向ひは養
者、のめ、船と免さるへと在り、有るがれともえり、もと
以て過すしもとを艦船と利とせんのめの書翰と奉
あらハ船と確て利と全くも免とせんのめの書翰と奉
若と船とあく少ひと偽り軍船と免さるへと免
勢と假と一必罪忍の振舞、のめの書翰と成
じうと思ひ、軍船と利とせんとあらハ利と没
人半の筋叶と恩ひと換とんと換とんと換とん
利とほんと欲せん國をうち雍敏と耕し、因をハ
右利とあく少ひと偽り軍船と免さるへと免

交易を免さずんば軍船を向けんと書翰に載せ、免さざ
るの返翰を請け、虚言を恥じて軍船を向けるは義者の為
す處にして左ハ有度きなれども、元より義をもつて送り
し書に非ず、利を得ん為の書翰と察したれば、恥を捨て利
を全うすること肝要なるべし。

若し恥を忍ばず小国と侮り軍船向けなば多く軍勢を損

ずべし。必ず龜忽の振舞いあるべからず。交易成就せざるを悪んで軍船を向け戦わんとするは、利を得ん事の叶わざるを悪んで損をもつて補わんとするが如し。

名義とそ世様にて利あるべ免へ身一せハ難
為帝、身も負て免様めらふらむ向かく者私
保たれらうべ免までる事あれば皆免とまは
若も添ハ川をあらべて免き也む多山と
跡立テアニモ芦日和ヘハ免字とソトテテ
帝坐とて思て軍船を向へ軍ハ山よどぬ海
ち延ふくらひやくもふくらひあへて日和も御
艦軍坐てかへてあもしやかく妙少の城船と傍
人船を用意候ひ有半島を放うと、船皆熟し
の用意處で船あれひそぬ範もあふと軍船を
命るゆきゆけハシキヤシタシテ各の者とあが

右利をよくよく分別なして損をせざるようにすべし。
利を得んと欲せば國を守り雜穀を耕し、日本へは不來こそ安穩にして利なるべし。

免すは安し、生は難し。國帝（大統領）は國に有りて安穩なるとも向かうた者、船共々危うかるべし。

残し置きたる妻子共、皆討ち死にと聞かば、こぼす涙は川をなすべし。嘆き悲しむ声、大山を動かすべし。ああ、そ

の声日本へは見聞きすといえども心には聞こえん。

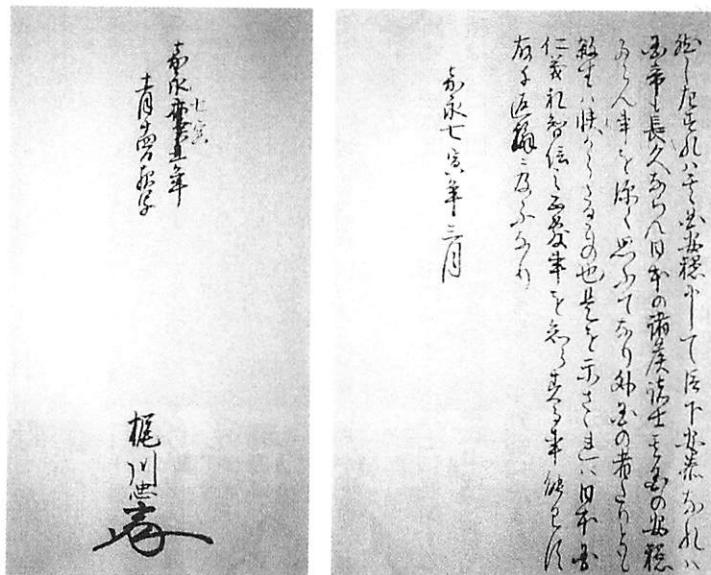
國帝これを思はば軍船を向けん事は止めよ。是れ返翰を送るからは少しも早く向かい来るべし。日本にて聊かも驚くこと曾てなし。前にも言う如く外国の賊船を防がんために用意調い、有事厳重なるまでは猶皆殺しの用意、速に整いたればこそ返翰に及ぶまで軍船を向けざる時は、日本は手を地にふし無智の者と察するなり。

然し、さすれば其の国安寧にして臣下安泰なれば國帝も長久ならん。日本の諸侯諸士、其の国の安寧たらん事を深く思つてなり。外国の者たりとも殺生は快よからざるものなり。是を示さざれば日本國仁義礼智信の正しき事を知らすること能はず。故に返翰に及ぶなり。

嘉永七寅年 三月

三 おわりに

この諮詢政策の結果七百近い意見があつたが、勝海舟らのもの以外は殆ど見るべきものは無かつたという。例えは徳川斉昭らの、交渉すると見せかけ敵の大将を白刃一閃して倒し黒船を奪うとか、アメリカ兵を酔わせてどうこうするなど、さらに、百年後の太平洋戦争時の一般の人々の米国の国家や軍事や兵士に関する滅茶苦茶な認識とか、意見などと比較して、この梶川佐伯藩士の文章現在から見ると、多少の誤認や飛躍などが見られるものの、当時極めて乏しい外国の情報を元に理路整然と整えられており、恐らく佐伯藩士の代表的意見をも伝えられているのではないでしょうか。



嘉永七寅年（＝嘉永六年、將軍死去のため）
十一月十四日 抜写 梶川忠（花押）